東北タイにおけるアヒル放飼農法の経済性と規定要因

――コンケン県の灌漑地域を対象として――

平成２５年入学
派遣先国：タイ王国
吉田　祐貴

キーワード：東北タイ，アヒル，稲作，天水田・灌漑田，Rice-Duck Farming，農学

対象とする問題の概要

アヒルは、中国や東南アジア諸国において伝統的に飼育、消費されてきた。現在、その生産量の約 90%をアジアが担っている。

タイでは、アヒルは肉・卵ともに食されてきた。鶏肉・鶏卵の生産量が急増する中においてさえも消費量は一定に保たれてきたように、アヒルは現代においても重要な家禽である。

また、アヒルの卵（写真１）は鶏卵に比べ低コレステロールであるため、近年の健康ブームによって今後需要が高まることも十分に考えられるだろう。

写真１：アヒルの卵（上から中、小、大）
大きさは鶏卵よりも一回り大きい。
大きさに応じて価格が異なる。（3~5Baht）

写真２：灌漑田（奥）
※ネットを張り巡らすことでアヒルの移動を制限している。

1990 年代から日本のアイガモ農法を中心に各地でアヒル放飼農法が普及してきた影響もあって、その環境親和性、稲作への寄与、農家の経済性などに関する活発な研究・議論がなされてきた。とりわけ中国や東南アジアでは伝統的にアヒルが飼育されてきたことから、持続的な農業体系として期待されている。

研究目的

アヒル放飼農法の経済性に関する多くの既存研究があるものの、その前提にある生産体系の規定要因についての言及はあまりなされていない。

一般的にアヒルは恒常的な水利用が可能な地域で飼育され、稲

作は飼料供給面で大きな役割を持つことから、年間を通じた稲作が可能な灌漑田（前頁、写真２）が望ましい。

調査地である東北タイは、降雨の不安定性などの影響で恒常的な水利用が難しく、伝統的に天水稲作が続いてきた地域（写真３）であるため、灌漑の普及範囲は他の地域よりも限定的である。

本研究の目的はアヒル飼育農家、非飼育農家双方に対する質問票を基にした聞き取り調査、参与観察調査から、東北タイにおけるアヒル放飼に最適な規模、それに必要な農地や資源量、飼育／非飼育農家を分ける制約要因などを考察し、アヒル放飼農法の経済性と地域的な課題を明確化することである。

写真３：乾季の天水田
水田の真ん中には『産米林』と呼ばれる木が自生している。

フィールドワークから得られた知見について

今回のフィールドワークでは調査地の選定も兼ね、私は東北タイの様々な場所を訪れた。

各地域によって農業体系は異なり、その違いが多様な農業景観を創り出していた。私の渡航期間が乾季だったこともあって、天水田と灌漑田の景観の違いを顕著に見ることができたのは良い経験だった。

さらに田んぼ一枚一枚を見ていくと、稲の条がきちんと整備されているか（移植か直播か）、刈り取り後の稲株の長さが均一であるか（機械の利用）といった違いがある。こうしたところに、農家の意思決定や置かれている文脈の違いが反映されている。

東北タイでは、主食となる米の他に、降雨の不安定性、不毛な土壌などへ耐性を持つサトウキビ（写真４）やキャッサバ（写真５）が換金作物として主に栽培されている。サトウキビは養分吸収効率が高いこと、一方のキャッサバは生長速度が緩やかで少ない養分や水分量でも生育できることによって、同じ耐性でも両者は異なるかたちで不毛な土壌に適応している。

私がお世話になったコンケン大学の農学部では、大学の農場や試験場において試験的な栽培を行い、そこで得られた成果を基に協力農家へ栽培品種を提供、農家の実践をフィードバックする形で農家と協力した農業技術普及が目指されてきた。

あわせて、農家の置かれている生態環境や社会経済状況などの調査を多角的に行い、政府や支援団体などと協力して生産環境を改善していくことで、包括的に

写真４：サトウキビ
マハサラカム県の農業試験場にて

写真５：キャッサバの収穫
コンケン大学試験農場にて

農家を支援している。

ここでは、農業を介して文理の研究者による協力関係が築かれ、自然科学・社会科学双方からの多角的な分析がなされており、学際研究について考える上で非常に良い環境であったと同時に、『農業』や『農』というものが自然と人間の相互行為によって織りなされる文理融合的なフィールドであることを強く認識させられた。

今後の展開・反省点

今回の調査では、調査農村の外部へ移動しているアヒル農家にも聞き取り調査を行うことができた。これは、従来のアヒル放飼農法とは異なった飼育体系であり、非常に興味深い動きである。従来のかたちとの比較を通じて、『移動』を通じてどのようにアヒル飼育体系が変化したのかということも今後調べていきたい。

そのためには、調査農村における飼育体系を押さえておく必要がある。農家からの聞き取りによると、アヒルは動物であり移動し、ときには群からはぐれてしまうため、監視しておく必要があるという。（写真６）よって、今後の調査では位置的な要因にも着目し、地図の作成を行っていこうと考えている。

今回の聞き取り調査では、通訳を介して農家と会話することが多かったが、自分で話せる範囲はなるべく自分で行うことで、理解を深めるとともにインフォーマントとなる農家との良好な関係を築いていきたい。

写真６：アヒルの大移動

※1 群は 1000 羽前後